

【原著】

# シェイクスピア悲劇『リア王』

——王女コーディリアの Nothing Speech の語るもの（その2）——

三 戸 祥 子

One of the Great Tragedies, *King Lear* by William Shakespeare

——What Princess Cordelia's 'Nothing Speech' Tells Us (Part 2)——

Sachiko Mito

## 第三章 嵐の中のリア

——俺さまは何者か？ ——

第三幕第四場は、この劇の、いわば山場である。第三幕全体を指して、悲劇『リア王』の最大の山場と言うこともできようが、なかでも世紀を超えて残る不朽の名作たらしめる要因は、この第四場にあるといってよい。それは、ここにいたってリア開眼のときを迎える故である。

では、どのようにして、その開眼の瞬間が訪れるのであろうか、冒頭から少しずつ見ていくことにしたい。

第三幕第一場冒頭、場面は一転、荒野に移る。娘2人に裏切られた思いのリアは落胆と怒りのあまり逆上し、グロースターの居城を出て行く。あてもなく嵐の吹きすさぶ荒野に身を曝す老王に随うのは道化ひとりである。リアの消息を求めて開門を乞うものの、コーンウォール公爵夫妻から門前払いを食らった従者／忠臣ケントは、荒野においてリア王の様子をある紳士から報告を受ける。そこで、（正体を隠したまま、偽名カイウスを名乗り、リア王に従者として抱えられたケントであるが）変わらぬ忠義心から、今はフランス王妃となったコーディリアへの親書を託す。

実は、リア出奔の後、老王リアの処遇を巡っては、2人の王位継承者であるオルバニー公（長姉ゴネリルの夫）とコーンウォール公（次姉リーガンの夫）が対立を深め、それは国内を二分する争いに発展する様相を呈していた。（リアをないがしろにする点では、姉妹とコーンウォール公の考えは一致していたが、オルバニー公はより寛大、かつ公正な考え方をする人物として描かれている。）ドーヴァー海峡を挟んだ隣国のフランスに、こうした国情が伝わらぬはずはない。歴史をみれば、一国の内紛は外憂の種になることは必定。ケントは、既にフランス王が軍を率いてブリテン侵攻に動き出したとの情報を得ていた。（実は、追放後、ケントは秘かにコーディリアと交信していたのだ。父王の身を案じるコーディリアの意を受けてのことである。）このとき、ケントには、フランス王は王妃を伴ってドーヴァーまで進軍していることも分かっていた。

ケントの目下の関心は、内紛とフランス王による侵攻といった祖国の危機はともかく、悲嘆の最中にあるリア王とコーディリアの再会にあった。そこで、秘かなる親書を使者に託すとい

う一計を案じるのである。リア王を癒すものはコーディリアを置いて他にはなかった。真の愛を見抜き、言葉に真実を読み取るケントは、王女のうちコーディリアに絶大の信頼を寄せていた。

＜リアの実像＞ ― 持たざる老翁

さて、こうした忠義者の願いを知る由もない当のリア王は、吹きすさぶ雨風を相手に命知らずの対決を挑んでいた。第三幕第二場、肉体を痛め、満身の力を振り絞って大声で叫ぶリア。供は、道化ひとりである。

Lear: Rumble thy bellyful. Spit, fire; spout, rain.  
Nor rain, wind, thunder, fire, are my daughters.  
I tax nor you, you elements, with unkindness;  
I never gave you kingdom, call'd you children;  
You owe me no subscription. Then let fall  
Your horrible pleasure. Here I stand, your slave,  
A poor, infirm, weak and despis'd old man;  
But yet I call you servile ministers  
That will with two pernicious daughters join  
Your high-engender'd battles 'gainst a head  
So old and white as this. O, ho! 'tis foul!

Fool: He that has a house to put's head in has a good  
head-piece.

(Act 3. 2. ll. 14~26)

あまりの仕打ち、あまりの忘恩に憤懣やるかたなく、激情に突き動かされ、いわば発作的に飛び出した行手は荒野。打ち出してみれば、そこは嵐。ええい、ままよ。この老躯を打つなら打て、打ちのめせ。「雨も、風も、落雷も許すぞ、思う存分荒れ狂ってこの儂を苦しめるがよい。」・・何しろ、自然のあらゆる物は（引用中第16行：elements—ここでは、rain, wind, thunderを言い換えた語）あの恩知らずの娘らとは違う、何の関わりもなき本来の営みを為すのみ。・・そうだ、王国を分け与えた覚えもない、娘と呼んだ覚えもない。よって、お前ら elements には儂に報いる恩義などない。

と、物分りの良い寛容を口にしつつも、娘らによる忘恩という投げ矢に深手を負った老躯を相手に、尚、追い討ちを掛ける自然に向って悪態をつかないでおれぬリア。「あやつら（2人の冷酷な娘）と結託したな」と怪しみ、蔑称（引用中第21行：servile ministers）をもって報いもする。

しかし、ここで目を引くのは、リアが自らの老いに言及していることである。しかも、暗に憐れを掛けて不思議はあるまいと、相手の同情を引くかのような語が口をついて出てくる。弱さ、老いを示す形容詞ばかりである。これはいかなる現象か？ 端（はな）から太刀打ちのできぬ自然を前にしてとはいいいながら、弱音を吐くリアがここにある。引用第20行、‘A poor, infirm, weak, despis'd old man’／そして第23~24行：・・ ‘gainst a head / So old and white as this’——自らを弱き者と認じ、無力にして、独りでは何事も為し得ぬ老人を名乗るとは・・。いや、それだけではない。「疎まれ、蔑まれたる老いぼれ」と自嘲するのである。

確かに、幕開け草々、高齢を理由に国政から身を引き、次世代に引き渡したいとして退位を宣言したリアではあった。だがその時、我が身を無力、無能とはけっして思っていなかったはずである。まして、蔑みの目と仕打ちを持って他者から迎えられようなど、夢想だにしなかったはず。さらに、この老いた白髪頭に雨嵐を降らし、打ちのめそうと言うのか・・・と、泣き言めいた言葉も吐く。この状況を何と解せばよいのか。

ひとつには、リアの内面の変化——荒れ狂うリアと、客観的に自己を見るもうひとりのリアの芽生えである。実の娘から「こちらの言う通りにせぬお積りなら、お世話はしかねます。」最期通牒を突きつけられたことによって、王位と権威、権益を脱ぎ捨てた者の悲哀と無力、老いて貧者となった者の寄る辺なさを思い知ることになったのか。そして、目を背けようにも背け通せぬ現実に気が付き始めたのか。

己の欲する所を押し通そうとするかつてのリア王は、少しずつ翳りを見せ始めることは確かである。そして、荒野においては、「嵐」に変容し、人間を圧倒する自然を前に、自己の無力を実感する。もはや王位などあろうと無かろうとかまわず襲い掛かる自然。老いに手加減などありはせぬ。人間と自然——格闘あるのみ。それもひとつの目覚めであるが、真実の入口に過ぎない。入口の内に招き入れるのは、思わぬ哲人 philosopher（リアが与えた異名）との遭遇である。そこでまた一つ、リアは客観の眼を与えられることになる。無冠となった王を揶揄することによって自省を促す道化の眼とは違って、真っ向から挑んでくる眼であった。

#### 〔変化の兆し〕

その愛を言葉通りに信じ、老後の安寧を託した2人の娘の予期せぬ仕打ちに、悪夢を見ることになったリアだが、老軀を恨みつつ為すすべなく憤死するわけではない。一介の老人と見くびってはならない。

第三幕第一場、第二場と垣間見たように、落胆、憤激、疎外、孤独、あらゆる禍を一身に背負って屑折れるかに見えるながら、リアは、嵐の中、自然の猛威に肉体を曝すうち、次第に内省的になっていく。尤も、容易には、国土のすべてを譲り渡し、王冠はもとより、国王の権限、利権のすべてを分け与えた、その報いを得られなかった理不尽を恨む心情から自由になるわけではないが・・・。

#### <弱き者>

現在の自己の実像を受容し始めたリアは、やがて自分の周辺にある弱き者、貧しき者に眼を向けるゆとりを、ある種優しさを示すようになっていく。嵐に身を曝してこそ知る感情であった。第三幕第二場、ケントは、無帽で荒野に仁王立ちし、嵐を相手に叫ぶ老王の姿を見出して驚愕、あばら家ながら、雨風を僅かに凌ぐべく、案内しようとする。

Lear:

My wits begin to turn.

Come on, my boy. How dost, my boy? Art cold?

I am cold myself. Where is this straw, my fellow?

The art of our necessities is strange

That can make vile things precious. Come, your hovel.

Poor fool and knave, I have one part in my heart

That's sorry yet for thee.

Fool: [Sings] He that has and a little tiny wit  
With heigh-ho, the wind and the rain ——  
Must make content with his fortunes fit,  
Though the rain it raineth every day.  
(Act 3. 2. ll. 67~77)

ケントの登場と主人のみを案ずる進言をしかと耳にしているのか否か、リアは我が事よりも  
随人の道化の身を案じて、「寒くはないか？」と声をかけ、先に小屋へと急がせる。暖を取る  
にも、身体を休めるにも足りるとは到底思えぬ境涯に不満を口にするどころか、引用第70~71  
行「何と、これは不思議、窮すれば平常ならば厭うべきものも有り難きもの」と感嘆してみせ  
るリア。誰も目にしたことのない王であったろう。

頭がおかしくなっていくようだ。と言いつつ、リアにはこのとき、貧しき家なき子への憐れ  
を感じる心が確かに在った。それを暗に正気／正常と褒めるのか、道化は、唄に寄せて「正気  
なる人は、足るを知るもの」と寿ぐそぶりをみせる。(注1：make content with his fortunes fit  
の意)

こうした弱者への配慮は、第三幕第四場に至ってさらに広がりや深みを増していく。

いよいよ、あばら家に到着したもの、リア王はなかなか中に入ろうとしない。促す従者ケ  
ント／カイウスに向かって、葛藤を吐露する。

Lear: When the mind's free  
The body's delicate; this tempest in my mind  
Doth from my senses take all feeling else,  
Save what beats there. Filial ingratitude!  
(中略)  
No, I will weep no more. In such a night,  
To shut me out! Pour on; I will endure.  
In such a night as this! O Regan, Goneril!  
Your old kind father, whose frank heart gave all!  
O, that way madness lies; let me shun that;  
No more of that.  
(Act 3. 4. ll. 11~22)

リアは、こうした嵐の宵こそ屋外に居させてくれ、締め出してくれと雨風に打たれることを  
むしろ望む。肉体の痛み能耐え得ぬ折りは、心の内に痛み／悩ましきものを抱えぬものだ、と  
言う。リアを苦しめる「内なる嵐」(引用第12行：this tempest in my mind)——は、外なる嵐  
など吹き飛ばしてくれよう。吹きすさぶ雨風、雷に打たれて、あの禍を洗い流してしまいた  
い！ そんな心境であるのかもしれぬ。このままでは、狂ってしまう予感がするに違いない。  
心の内に荒れ狂う嵐とは、引用中では Filial ingratitude という語で置き換えられるが、正確に  
は、我が子の忘恩を思って、狂おしいまでに揺すぶられる老王自身の激情を指すのであろう。

だからこそ、儂を締め出せ、小屋に招こうとするなとケントを制するのではないか。だが、  
自己を抑制する意識も持ち合わせるリアである。狂気には陥りたくないのだ。

リアの葛藤よりも、身体の安全を懸念するケントは重ねて小屋に招く。が、逆にお前の身体をこそ慈しめと諭し、先に入れと労わる。そして傍らにいる道化にも目を止め、やはり先に中へと促すのである。

Kent: Good my lord, enter here.  
Lear: Prithce go in thyself; seek thine own ease.  
This tempest will not give me leave to ponder  
On things would hurt me more. But I'll go in.  
[To the Fool] In, boy; go first. — You houseless  
poverty —  
Nay, get thee in. I'll pray, and then I'll sleep. [Exit Fool]  
(Act 3. 4. ll. 22~27)

王よりも先に雨露凌ぐ屋根の下に身を置く事をためらうのか、おそらくはすぐには入ろうとしない道化をして、さあ、よいから先に行けと急かし、小屋へと向かわせる。引用文末尾の言葉「祈りをあげて眠りに就くでしょう。」——それは、道化を納得させる方便であったに違いない。

さて、独りになったリアは、忘恩の娘を呪うことはもはや無く——少なくともこの場では無い——富める者、奢れる／驕れる者への戒めを口にすることになる。

Lear: Poor naked wretches, wheresoe'er you are,  
That bide the pelting of this pitiless storm,  
How shall your houseless heads and unfed sides,  
Your loop'd and window'd raggedness, defend you  
From seasons such as these? O, I have ta'en  
Too little care of this! Take physic, pomp;  
Expose thyself to feel what wretches feel,  
That thou mayst shake the superflux to them,  
And show the heavens more just.  
(Act 3. 4. ll. 28~36)

引用文第28行、poor naked wretches と複数形によって不特定多数の哀れなる者に語りかけていることに我々は目を引かれないではおれない。一義的には、目の前の道化、ケントを指したものと考えることもできよう。しかし、続く wheresoe'er you are とあることから、そこが何処であれ、リア自身が今まさに打たれているような、同じほどの激しい雨風に襲われて行き場を持たぬ者たち、身にまとう衣も、腹を満たす食い物も満足のならぬ者のすべてに語りかけていることが窺われる。「いったい、どうやって穴だらけのぼろをまとい、腹をすかしたまま、この嵐を凌ぐのか？」

はた、と思い知る己の無知に愕然とする——名もなく貧しき民の暮らしを慮ることのただの一度としてなかった己の無知、王位に胡坐をかいて平然とし、贅沢にうつつをぬかした日々の傲慢——過ぎし日の己を顧みて恥じ入るリアである。引用第33行「奢りし者、哀れなる民の知

る辛さ、ひもじさを薬にせよ」とは、自らへの戒めでなくて他の何であろう。

余剰なるもの、高価な数知れぬ衣裳、食べきれぬ美食、すべて分け与えよ。さらば、神々は真に善／義なりと合点するであろう。王位を捨てて知る王位の心得である。尤も、半ば自失の状態で口走る言葉であるため、今もって我が身を治世を司る現王と思つての弁に違いない。

#### ＜もうひとりの阿呆＞ 二重写しの悪魔

いよいよ、あばら家に入らんとするその時、道化が恐怖の声を挙げる。……はいっちゃダメだ、助けてくれ！ 小屋から走り出るなり「妖怪か、化け物か、なにやら居る！」

たしかに、先客はいたようだ。乞食の風体をした誰とも知らぬ男。見れば薄汚い、ぼろで体を覆う輩。名は、Tom——本人が名乗ったそうな。実はこの乞食、グロースター侯爵の嫡子エドガーである。腹違いの弟、エドモンドに謀られ、謀反人の汚名を着て逃亡中の身。乞食に身を窺して当座の難は逃れた次第。潔癖の証を立てる見込みは暗中模索の態である。当の父親は、愛人の産み落とした庶子を溺愛するあまり、その甘言と虚偽に翻弄され、嫡子による父殺しの謀略を信じたのである。作品『リア王』は、姉娘の甘言に屈したリア王と同じ過ちを冒した愚かなる父の物語を副筋として配した劇としても知られている。

だが、この父子の物語、単なる副筋に終わらない。ここ第三幕第四場、乞食のトム、変装したエドガーこそは、一介の老人に成り果てたリア王に開眼の機を与える、もうひとりの阿呆として、そしてかの philosopher として登場するのである。

- Lear: Didst thou give all to thy daughters? And art  
thou come to this?
- Edgar: Who gives anything to poor Tom? Whom the  
foul fiend hath led through fire and through flame, through  
ford and whirlpool, o'er bog and quagmire; that hath laid  
knives under his pillow and halters in his pew, set ratsbane  
by his porridge; made him proud of heart, to ride on a bay  
trotting-horse over four-inched bridges, to course his own  
shadow for a traitor. Bless thy five wits! Tom's a-cold. O,  
do de, do de, do de. Bless thee from whirlwinds, star-blast-  
ing, and taking! Do poor Tom some charity, whom the  
foul fiend vexes. There could I have him now —— and  
there —— and there again —— and there. [Storm still]
- Lear: What, has his daughters brought him to this  
pass?  
Couldst thou save nothing? Would'st thou give 'em all?
- Fool: Nay, he reserv'd a blanket, else we had been all  
sham'd.

(Act 3. 4. ll. 48~64)

リアは、物乞いらしき浮浪者を目にするや、開口一番「お前、何もかも自分の娘にやってしまったのか？」と尋ねる。そして、だから、こんな風体でこんなところに居るのか？とも訊く。乞食はトムと名乗り、誰か俺様に物を恵んでくれたか、呉やしまい？と答えるが、あとは お

ぞましき悪魔（引用第58-59行：the foul fiend）に取り付かれていると脅え、長々と酷い目にあったあれこれを言い立てる。

リアには、たちまち合点がいく。この裸同然で、しきりと寒がる乞食の惨状は、娘——悪魔のような、親の生き血を吸う極道娘の仕業に違いない！ 見知らぬ老人リアをかまうことなく、乞食は周りのものの目には映るはずの無い「悪魔」を指して「ほれ、あそこに。・・・あれ、あそこだ。」とおそらくは、ワナワナと、取り付いた「悪魔」に脅え震える。

やや、間違いない、ええ？ そうであろう、お前は娘のせいで、こんな目にあっておるのだな？——と、またしてもリアは繰り返し念を押すことになる。この世にあって、人を貶め、耐えがたき苦しみを与えるのは、娘という存在をおいて無い。リアにあっては、乞食のいう foul fiend とは、悪魔に等しい性根の娘に同化される。ほろを纏い、ブルブル、わなわなと震える憐れなる生きもの、こやつもまた、同じ運命。嵐の晩に、薄情、血の通わぬ悪鬼、恩知らずの娘たちに追い出されたのじゃろ、儂と同様、寄る辺なき貧者よ。宿無しよ。

いよいよ、正常なるところ、理性の働きを失いゆくリア王は、つい今しがた、道化を、ケントを憐れむべき民に見立てて、為政者たる者の怠慢、無知を恥じ入ったことを忘れたかのよう、自己と乞食のトムとを一体化し、力なき老人を弄り得意がる娘を悪鬼、悪魔と同一視するのである。

しかし、「お前の娘たちのせいだな？」と言った直後、引用第62行に注意を転ずれば、目下の惨状、そのすべての因が、親たる者、持てるすべてを子等に、娘等に分け与えたことにある事実も、しっかりとリアの内面に食い入っていることが分かる。すべてを遣った為、裸に成り下がった。——住处も、衣服も、地代も、ああ、王国のありとあらゆる富の源泉を、王冠の約束するありとあらゆる権威、権益のすべてを、だ。・・・そして、お前も同じ、すべてを遣ってしまったのだな。

と、そこへ間髪を入れず、道化が口を挟み揶揄する。「ようくごらんさい、こいつあは、ちゃんと毛布くらいは、てめえのために取っというたってわけ。」でなきゃ、わしら皆、とんだ赤恥かいっちまうよ。耳に入るリアではない。（引用には挙げないが）それどころか、従者ケント／カイウスが「娘など、この乞食にはありませんよ。」と老王の思い込みを正そうとするも何のその、ペリカンに比して親をないがしろにする娘を非難、罵倒してやまぬリアである。（注2：ペリカンの習性）

＜ああ、これだけのものか＞ — 人間の本质

しかし、衣ばかりか、根こそぎ剥がされ、無一物になった親（父親）の悲哀を偶然に出会った乞食のトムと分かち合うだけではなかった。リアは、その意識を次第、次第に狂気に掬い取られつつも、鋭い感性をもって、すべてを削ぎ落とした真実に近寄りつつあった。この、どこから来たとも分からぬ、孤独の浮浪者、気違いトム、裸同然の男の風体が導き教えるのか・・・。

Lear:       Why, thou wert better in a grave than to answer  
              with thy uncover'd body this extremity of the skies. Is man  
              no more than this? Consider him well. Thou ow'st the  
              worm no silk, the beast no hide, the sheep no wool, the cat  
              no perfume. Ha! Here's three on's are sophiscated!  
              Thou art the thing itself: unaccomadated man is no  
              More but such a poor, bare, forked animal as thou art. Off,

Off, you lendings! Come, unbutton here.

[*Tearing off his clothes.*]

(Act 3. 4. ll. 99~106)

戸外は、相変わらず激しい雨風が吹き荒れている。その音を耳にしながら、リアははたと思い当たる。この嵐に立ち向かうには、そうだ、そなたのように一糸纏わぬ体、裸こそ最良の衣。といったなり、トムを注視する。そうだ、そうではないか——裸の方が寧ろ、強いのだ。体に纏うものが一切無ければ、雨風に抗い、衣を、帽子を剥がされまい、奪い去られまい、と競うことはない。と、目を逸らさず乞食を見つめる——すると、そこに見出したものは……！——そうか、人間とは、ここに在る姿、これだけのもの、そうなのか！——

傍らの道化に、ケントに命じる。「よく見よ、この男を。よく、考えてみよ。」

ああ、お前は何か一つ借りが無い。絹も持たぬゆえ蚕の世話にはならぬ。毛皮も不要、よって広野の獣に用などない。羊を求め毛織物を織ることも要らぬ。香水じゃと？ 猫に恩義の負い目を背負ってまで要らん。王であった頃は、いや、娘2人の強欲に怒って城を飛び出した時には、物への、財への未練をたっぷりと心の内に抱えていたに違いないリア。どうした変容であろうか。

合理的説明はつかずとも、リアに自己の変容への自覚があるのか否か、誰にも分かるまい。ただ、突き進むリアを留めるものはない。傍に居る2人の戸惑いをよそに、老王は、わが身に纏う衣を厭わしように、もどかしくも、剥せ、脱がせ、と命じる。いや、衣自体に向って、叫ぶ。…… Off, off, you lendings! [下線は筆者] この異名に誰しも目を奪われよう。「借り物め、ええ、どこぞへ行ってしまえ！」ここで注目すべきは、衣を2人称 you で表わし、かつ同格 lendings で置き換えるという表現方法を取っていることである。ここが注目すべきところである。「おお、衣よ、お前は借り物」——借り物、仮の姿にはさらばじゃ、とでもいった声が、声ならぬ声が聞こえてくるかのようなのである。

リアのもどかしげな語調がその心情を伝えて余りある。Off, off, you lendings! に続いて Come, unbottun here と、従者を急かせ、一刻も早く衣を脱ごうとするさまに、外見を覆うものへの嫌悪、拒絶感が滲む。ぼろを纏う乞食トムの姿から、物をそぎ落とすことの自由さ、清々しさを知ったか。合理的思考はともかく、本能とでもいうべき直観か、装飾と無縁の自己に向おうと欲するリアである。

シェイクスピア作品ではよく問題にされる「外見と本質 (appearance & reality)」の対比であるが、ここには、そうした明白な言及はない。作中の人物に語らせることもない。だが、暗に、人の身体を覆う衣、装飾品は仮の姿を人間に与える手段にすぎない——それを脱ぎ捨て、剥し取った姿、素の姿こそ「偽り無き本性」と気付く、人間の本質に行き当たったかのようなリアの変容を窺わせる場面ではある。耳をすませば、「儂には外見の美德なんぞ無用じゃ！」という声が聞こえてくる気もしないではない。

そして、王位をはじめ、権威、権力、数え切れぬ絶対者の世俗的権益、そのすべても空しき装飾、人間の本質とはかけ離れたものに過ぎぬ。そうした境地に達しつつあるリアを見ることも可能であろう。「俺は何ものか？ / 誰か答えてくれるものはあるか？」

果たして、その間、その自問に与えられる答えを見出した瞬間であったのか……。 (注3：この後、リアは、乞食のトムを指して my philosopher と敬愛を示し、なお教えを乞う素振りをしきりと示す。)

#### 第四章 コーディリア再登場とその意味 ——語らずして語る女（ひと）——

第四幕第三場の冒頭、舞台はフランス軍の陣営が宿営するドーヴァー。リア王の使者（カイウスに扮する）ケントが、ある紳士を相手に、フランス王の突然の本国帰国の理由を問い質している。

Kent:           Why the King of France is so suddenly gone back  
                  know you no reason ?

Gentleman:   Something he left imperfect in the state,  
                  which since his coming forth is thought of, which imports  
                  to the king so much fear and danger that his personal  
                  return was most required and necessary.

(Act 4, 3, ll. 1 ~ 6)

特段の理由なく帰国したのではないか、との思いを拭いきれぬまま、ケントは紳士に、心当たりは在るかと尋ねている。意外なことに、紳士の応答から、すでに王がフランスを発つ以前から、解決を見ぬままに捨て置いた問題が何らか存在したことが分かる。本国からの急報は、王自身の帰国なくしては避け得ぬ危機的状況を告げるものであった由。

既に、この拙論第三章の末尾に触れたことであるが、劇中、フランス王は明快な理由を開示することなく、自身の馬頭を翻しイギリスを去る。しかも、王妃を敵地の港ドーヴァーに残したままの帰国である。フランス軍決起は、なによりも王妃となったコーディリアへの愛であったろう。第一幕冒頭の王国分割の場で仏王の表明した無欲／無心の愛、少なくとも、政治的思惑を超越した、いわば衣替えした彼の求愛の弁から推すならば、いまや仏王妃となったコーディリアへの愛こそが進軍を後押ししたと考えるのが自然であろう。そうであるなら、そもそも、仏軍の進軍／侵軍は、王妃の実父リア王の身を案じてのことであつたはず。その本意を果たさぬうちに帰国するとは、一体何が真の因であろうか・・・？ われわれの注目点はまさにここにある。

戦いの経験など全くあるはずもない王妃コーディリア、有能なる武将を残留軍の総指揮官として伺候させるからといって、あれほどに深い慈しみを注ぐ後の安全が保証されわけではない。フランス王に厳しい懷疑を向けるなら、早くも政治的、軍事的判断からして不利と見ての帰国か、他方、王妃は本意を遂げぬうちの帰国など納得はすまい。父の姿を確かめ、状況によっては、仏国に随伴、保護できぬか・・・とさえ願ったはずである。そこで、やむを得ぬ仏王単身の帰国か・・・。（単身といっても、無論主力軍を引き上げることは必定）果たして、ここに仏王の無欲の愛を見続けることはできるのか？ 敢えて答える必要もあるまい。

#### <徳高き美／語らぬ人の美>

さて、紳士の報告として描写されるに過ぎないが、上記引用にある対話の直後、コーディリアの子としての愛——別離を余儀なくされた父王への濁りなき思いが「語り」として10行ほど続く。

Gentleman:   Not to a rage; patience and sorrow strove

Who should express her goodliest. You have seen  
Sunshine and rain at once: her smiles and tears  
Were like a better way. Those happy smiles  
That play'd on her ripe lip seem'd not to know  
What guests were in her eyes, which parted thence  
As pearls from diamonds dropp'd. In brief,  
Sorrow would be a rarity most beloved  
If all could so become it.

(Act 4, 3, ll. 16~24)

リア王の無事を知って安堵すると同時に、在位の父の面影を求めるべくも無い現今の惨状を知って悲しみ呉れるコーディリアの姿、混在し、入り乱れる感情を描くことこそ主眼であるはずのこの場面。にもかかわらず、描かれるのは終始、コーディリアの美である。心の美であり、外見の美——読み方によっては sexuality をさえ感じさせる比喩的表現もさりげなく忍ばせている。艶やかな唇には喜びに満ちた笑み、かと思えば（その唇が知ってか知らぬまにか）眼には大粒の涙がはらはらと（頬を伝わる）……。その涙は、真珠に譬えられ、眼は宝石の王たるダイヤモンドに変容する。浮かぶ涙のせい、きらきらと輝く王妃の眼、そこに浮き上がってくる涙のひとつひとつが穢れなく純白の、いや透き通るばかりの真珠に生まれ変わる。

果ては、これほどの悲しみが似つかわしく映える人／御方など、この王妃コーディリア様をおいてあろうか、あろうはずもない・・と言わんばかりに、語り手は婉曲表現ながら、賛辞を惜しまない。耐え難き悲しみも、最上の美に変容するとき、ひとは誰しもむしろ羨望するものか。「誰しも、これほど美に映えるものなら、悲しみでさえ稀有なものと喜びの種とされよう。」——それにしても、シェイクスピアを置いて、このような発想と言葉を宿す人が在るとも思えない、そのような感慨に誰しも襲われはしまいか。

しかも、引用冒頭に立ち返るなら、語り手は開口一番、コーディリアの内なる葛藤に触れている。そして、その葛藤をして、この若き王妃の善なることの証とするのである。引用第17行、goodliness は、品位 (virtue; noble mind) という言葉に代えることもできようか。「悲しみに呉れながらも、その悲しみに耐えようと激情を抑制するところと、その悲しみが拮抗しておいんです。」そこに見たものは、激情に押し流されることなきかつての王女と根本は変わらぬ人であった。

しかし、このとき、聞き手ケントの関心は別のところにあったようである。ことばならぬ感情はさておき、なにか、コーディリア様の口からその麗しき唇から（老王の身を案じる）言葉は発せられはしなかったか？

Kent: Made she no verbal question?

Gentleman: Faith, once or twice she heav'd the name of  
Pantingly forth, as if it press'd her heart;  
Cried 'Sisters! sisters! Shame of ladies! Sisters!  
Kent! father! sisters! What i' th' storm? i' th' night?  
Let pity not be believ'd!' There she shook  
The holy water from her heavenly eyes,  
And clamour moisten'd; then away she started

To deal with grief alone.

(Act 4, 3, ll. 24~32)

確かに、声なることばもしかと耳を捉えていた。その艶つやと、濡れる真紅の唇から嘆息まじる言葉が洩れたのであった。喘ぐかのように、僅かな言葉を切れ切れに洩らしていた。だが、ここでも描かれるのは、やはり美に他ならない。他の追隨を許さぬ美を描くことに劇作家シェイクスピアの意図が潜むかのように。いうならば、耐える女（ひと）の美である。しかも、多くを語らない。発する言葉そのものは僅かではない。一貫して、言語を惜しむ女性がここにも描かれる。

上記引用、第27~29行に羅列される語彙は、いずれも短く、第一幕第一場の Nothing-Speech を口にするあのコーディリアを思い起こさせる。名詞語句の並列のみ。完成文は1例もない。むしろその無口ぶりは異常さを感じさせる。途切れ途切れの言葉から、予期、予想を裏切る父の惨状に声を失ったと解釈することは可能であろう。だが、悲劇、悲運の前に多弁となる例は、シェイクスピア劇女性人物にも多い中、やはりコーディリアの姿は稀少といわねばなるまい。(注4：英国史劇、詩作品の例)

読み手の恣意的といわれかねない想像、推察を加えて言葉を補い、このときのコーディリア姫の心のうちを描いてみるなら・・・「(嗚呼) お姉さま方! 王女として恥ずべきお振る舞い! ああ、ケント、ケントは何処に。お前がおそばに仕えていたなら、違ってもしようものを。お父様、お父様、(私がフランスに旅立った後の、お父様のことをお願いしたのに) ああ、お姉さま方といったら・・・!」嵐の中、(城内から) 走り出で、なんとなさるお積りでしょう?・・・もしくは、嵐に吹かれるに任せて、実父を捨て置くとは何と非情なところ、なんと、孝心忘るる振る舞いか。

このように、読み手の想像に任せ、思い描くことを果たして許されようか。

こうして、唯、唯、父の不幸を想い、悲しみに呉れるコーディリアは、無欲の人であるばかりか、恨みを知らぬ人である。上記引用の告げる通り、溺愛を報われぬ恨みを廃嫡という形で娘に報いた父王リアの惨状を悲しみ嘆くとも、「身から出た錆」として冷酷の父を襲った悲運に溜飲を下げることなど微塵もなき人である。

#### <リアの羞恥>

さて、コーディリア帰国の意味を知ってか知らでか、当のリア王は、自己を恥じ入り、けっして王女に会おうとせぬそうな。ここまで聞き手であったケントが一転、語り手となって老王の心情を代弁する。

Kent: Well, sir, the poor distressed Lear's i' th' town;  
Who sometime in his better tune remembers  
What we are come about, and by no means  
Will yield to see his daughter.

Gentleman: Why, good sir?

Kent: A sovereign shame so elbows him; his own unkindness,  
That stripp'd her from his benediction, turn'd her  
To foreign casualties, gave her dear rights  
To his dog-hearted daughters — these things sting

His mind so venomously that burning shame  
Detains him from Cordelia.

Gentleman:

Alack, poor gentleman!

(Act 4, 3, ll. 38~47)

ここでも、コーディリアの周辺にある人たち、その高貴なる人に信頼を寄せる人々が「自らは多くを語らぬ」王女／王妃に代わってその悲運を再現する。いわれ無き咎故の喪失（遺贈没収）、父としてのリアの非情がここに反復される。中でも、引用第45～48行にケントの代弁するリアの心の内に巢食う苦悩、自らの過ちに恥じ入るリアの葛藤は、コーディリアの悲運を強調するばかりか、姉の卑小、父の盲目を語って余りある。

思えば、慈しみ育てた末娘を見知らぬ土地に待ち設ける禍根の渦にもはや不要になった屑のごとく、放擲したのであった。そして今、隣国とはいえ、遙かより、海を越え、老いた父を訪ねてドーヴァーに降りたつコーディリアを拒むリアであった。胸の奥より咎が押しとどめるのか、会ってはならぬ、会う資格などお前には無い、と声がしてならぬ。

だが、時は熟し、父娘は再会のときを迎える。いよいよ、語らぬ人コーディリアの登場／再登場である。場面は、第四幕第四場、同じくドーヴァーの仏軍宿营地。

Cordelia: Alack, 'tis he! Why, he was met even now  
As mad as the vex'd sea, singing aloud,  
Crown'd with rank fumiter and furrow weeds,  
With hardocks, hemlock, nettles, cuckoo-flow'rs,  
Danel, and all the idle weeds that grow  
In our sustaining corn.

(Act 4, 4, ll. 1～6)

この台詞こそは、彼の有名なリア狂乱の姿を映す描写に他ならない。「花冠」を被りし老翁／老王のイメージはここから生まれる。シェイクスピア劇『リア王』の注釈書によっては、表紙絵に狂気の王、リアの胸像、もしくは大写しの頭部を含む顔面を掲げるものもある。あるいは、嵐の只中に立って怒り、絶叫する狂気の姿として描く例も少なくない。いずれにしても、焦点は、王冠の代わりに、野花を花冠に結い上げ被った／冠った老人・老王である。皮肉にも、自ら放擲した愛娘によって、その狂った姿がつまりらかに描かれるとは何としたことか。劇作家シェイクスピアには当然の如く、はっきりとした意図があつてのことに違いない。狂気の王を語るべきときは、コーディリアその人でなくてならぬ台詞、言葉が割り当てられる。しかし、これほど言葉を語らぬ——主要人物とされながら、出番はもとより、台詞の少ない役どころも珍しい。（注5：若くして人生の真実／現世の真理をつく言葉）

この語りに近い言葉に続く台詞から、リア王の心身の健康の見立て（診断、診察）を託された医師の報告を耳にしつつ、コーディリアが父王の生命の危機を感じることが窺われる。だが、父の身を案じる孝行娘ばかりを演じる暇は許されない。仏王妃として、仏軍全軍の指揮官／総責任者としての責務が他方に控えているのだ。

使者からイギリス軍のドーヴァー進軍を告げられるときの応答に注目しよう。

Messenger: News, madam:  
The British pow'rs are marching hitherward.  
Cordelia: 'Tis known before; our preparation stands  
In expectation of them. O dear father!  
It is thy business that I go about;  
Therefore great France  
My mourning and importun'd tears hath pitied.  
No blown ambition doth our arms incite,  
But love, dear love, and our ag'd father's right.  
Soon may I hear and see him! [Exeunt.]

(Act 4. 4. ll. 20~29)

注目すべきは、引用第23行～26行である。聞き様によっては殊更に語らせる台詞と響く。フランス王への賞賛、弁護と響くことは、仏王の邪心を疑う者への牽制とも受け取れる言葉ではないか。

コーディリアは、フランス軍の進軍は、けっして他国の侵略が目的ではないと語る。しかも、自軍の偵察兵を相手にした応答の中でのことである。今更に、家臣であり、自軍の一兵卒に挙兵の意図を告げるというのであろうか。なかなか不思議、かつ不可解な発言である。挙兵の意図など、本国を発つ際に既に全軍に周知すべき重大事であろう。劇中、どれだけの軍勢が詳細は語られないが、いずれにしても王自ら指揮を執っての進軍、かなりの兵を率いての挙兵であることは十分に想像できる。ならば、通常以上の万全の士気統制、軍規の徹底を必要とする。無論のこと、信頼しうる大小の隊軍を率いる指揮官は不可欠である。少なくとも、そうした上官には、覇権や土地を巡っての戦を目的とせぬ進軍であることを徹底通達しておくべきことは知れたこと。今更に王妃を介して語るには別の意図あつてのこと——真の聞き手は唯一、聴衆（の耳）以外に聞かせる相手はあるまい。無心の王女、王妃の印象をいっそう濃くし、仏王に対して起こりうる懷疑を緩和する意図である。（注6：フランス王の真意）

それ故に、仏王妃コーディリアは仏王の弁護をするかのような弁明を口にすることになる。ところが、シェイクスピアが意図したか否か、逆説的に、仏王への不信、懷疑が芽吹く。確かに、引用に見るように、始まりは王妃の故国にあって、娘に裏切られ苦悩する父を案じ、窮状から救わんとする王妃の願いに譲歩し、挙兵となったのやもしれぬ。また、一国の王である者が、素手の王妃を独り旅立たせるわけにはいくまい。だが、軍（大軍）を率いての突然の帰国は何故か？・・・王妃にとっては（他意なき）仏王の帰郷としても、第三者の目には怪しまれて当然である。内戦の恐れもあるイギリスの不穏な情勢の噂は対岸のフランスにもおよび、それだけに十全の備えをもって海を渡るが賢明との判断か。寛容な推察を施すにしても、終幕にいたってコーディリアの死が現実となってどのような行動に出るか、はなはだ興味は尽きぬ。それにしても、フランス王に政治的思惑があったとするなら、第一幕第一場の慈愛溢れる求愛を信じたコーディリアはとんだ道化に成り下がる恐れも生まれるというもの。「貞女、賢女、穢れ無き美」の鑑たるコーディリア像は崩折れることになる。シェイクスピア界は騒然とするに違いない。（シェイクスピア界とは、研究世界、学者世界、一般読者、観客の世界、そのすべてを包含する筆者造語）

この問題は、別の機会に譲るとして、父娘再会の場へと歩を進めることにしたい。どのよう

な変容が描かれるのか。

## 第五章 父娘の再会と死 ——もっとも多弁なるコーディリア——

第四幕第七場、遂に老王リアと末の王女、コーディリアは再会のときを迎える。不思議なことに、ここに及んで王女は未知の素顔を見せる。これほどに多くを語るコーディリアの姿を舞台上に見ることはあるまい。登場人物もまた、対話の相手としても、傍観者としても、これほどに己の感情を、想いを口にする王女を目の当たりにする者は居まい。

劇の冒頭、父を、国王を前に愛の表明を求められたとき、「何も申し上げることはございません。」(Nothin-Speech)と頑なまでに語ることを拒んだこの人ではなかったか。あの同じコーディリア姫は何処に?・・・と、おもわず問うてみたくもなるではないか。

リア王が目覚めるまでのひととき、コーディリアは忠臣ケントに謝意を述べ、治癒に力を尽くす医師を相手に様態を確かめるが、細やかな気遣いをみせ、言葉の端々には飾らぬ心情の吐露を忍ばせてもいる。もはや、片意地を張る第三王女の姿はない。

Cordelia: O thou good Kent, how shall I live and work  
To match thy goodness? My life will be too short,  
And every measure fail me.

Kent: To be acknowledg'd, madam, is o'erpaid.  
All my reports go with the modest truth;  
Nor more nor clipp'd, but so.

Cordelia: Be better suited.  
These weeds are memories of those worser hours;  
I prithee out them off.

(Act 4. 7. ll. 1 ~ 8)

引用文第2行目、thy goodnessとあるこの語は、文字通りの善意もさることながら、ケントの変わらぬ忠誠心と実践を指しての言葉と解することができよう。リア王の安寧を最優先に身を粉にして尽くさんとするケントに、どう報いるべきか悩ましき喜びを胸に語りかけるコーディリアである。そして、見逃してならないのは、はや、何故か胸騒ぎのようなものを感じるのか、自分の命の短きことを恐れ、ケントの働きに報いる願いの叶わぬことを暗に詫びていることである。作劇上の必要からこの台詞を与えたとも思えるが、いずれにしても、既にコーディリア自身に覚悟のようなものが胸底に芽生えていたことは疑い得ない。実父の回復と安全を願う一方で、自身のことは天命を待つ心境であったのか?

それにしても、コーディリアとケントの2人——そこには、相通ずるものがある。それは、劇冒頭、リアによる王国分割を巡って登場人物間に交わされるさまざまな言葉から、既に感じ取られてきた共通性であった。

2人はともに命知らずである。父王の寵愛を一身に浴び(自ら望まずして与えられた慈愛であったもようだが)姉2人をはるかに凌ぐ肥沃、かつ広大な土地の遺贈も約束されていた第三王女コーディリア。にもかかわらず、世俗の欲を超越するこの姫、「何も申し上げることはご

「しません。」と、父への、絶対者への愛表明を堂々拒み、すべてを一瞬にして失う。あわや、命も危うい反逆である。命の没収／喪失に代えて、廃嫡、絶縁——捨て子のために甘んじるのである。幸か不幸か、無一物の拾い主として名乗りを上げるのがフランス王である。他方、老王の重大なる過ちに目して語らぬを由とせず、わが命を顧みず諫言を奏し、追放の憂き目に遭うのがケントである。

加えてこの2人、信念の人である。けっして価値を変容させず、一貫して信じるものを保持、実践に及ぶに迷いなしの生き方に徹する。

敢えて、言葉にして確認しあう必要もなく、相通ずるものを内に持つ二人であるためか、コーディリアは、ケントの身を纏う衣に、忌むべき過去の日々を想い起こさせるとして、他の衣服に着替えよと指示を与える。この飾らぬ弱音と嫌悪、悲しみの吐露をみよ・・・それは、心許す対手を前にしてこそ可能な素顔の表出であって他の何であろう。

それにしても、真の再会の瞬間を待ちあぐねるコーディリアは、傍らに伺候する医師に注意／視線を転じ、父リアの容態を問わずにおれない。

Coedelia: Then be't so, my good lord. [To the Doctor]  
How does the King?

Doctor: Madam, sleeps still.

Cordelia: O you kind gods,  
Cure this great breach in his abused nature!  
Th' untun'd and jarring senses, O, wind up  
Of this child-changed father!

Doctor: So please your Majsty  
That we may wake the King; he hath slept long.

Cordelia: Be govern'd by your knowledge, and proceed  
I' th' sway of your own will. [To the gentleman] Is he  
array'd?

Gentleman: Ay, madam; in the heaviness of sleep  
We put fresh garments on him.

(Act 4. 7. ll. 12~22)

未だ目覚めぬまま寝台に横臥する老父を思い浮かべつつ、辛く哀しい感慨に襲われるコーディリアである。正気を失い、あたかも幼子のように精神や思考力を退化させた様子を耳にしていることか、かつての王座に君臨する父を知るだけに、その変容は聞くに忍びない。その思いが引用第17行～18行 O wind up/ Of this child-changed father! に凝縮される。すべての因は、想像を絶する艱難辛苦による自己喪失——狂気のなせる業か。だが、狂気は視界を朦朧とさせ、苦悶の源である現実を遠ざけてもくれよう。それでも尚、現実に戻り、正気に返っての再会を願わずにおれぬのが、人の（子の）心情である。

その仲介を果たすのが、医術であり、医術を知る医師であった。

Doctor: Be by, good madam, when we do awake him;

I doubt not of his temperance.

Cordelia: Very well.

Doctor: Please you, draw near. Louder the music  
there!

*He draws the curtain and discovers Lear asleep in bed.*

Cordelia: O my dear father! Restoration hang  
Thy medicine on my lips, and let this kiss  
Repair those violent harms that my two sisters  
Have in thy reverence made.

Kent: Kind and dear princess!  
(Act 4. 7. ll. 23~29)

もはや案ずる必要はない、たとえ今目覚めても、ここに運び込まれる以前のように荒れ狂い、罵詈雑言を発して周囲のものを驚かせ、脅えさせることはあるまいと医師は保証し、いざ、帳を開けんとする・・・。

期待と不安の交錯を覚えながらも「わかりました・・・」医師に託すよりない。なによりも会いたいのだ。眼を交わして父と知り、娘と知って欲しかった。帳の隔てが掃われるや、コーディリアは、未だ眼を閉じる父王の顔に頬寄せ、唇で触れる。どうぞ、この接吻が貴方様の苦しみ、悲しみ、お心の傷を癒してくれますよう・・・。

願いをこめての接吻であったが、ついぞ、2人の姉に対する恨み、非難の言葉も口をついて出る。恨みとはいってもそれは、実父を蔑ろ（ないがしろ）にした子としての不義理、不人情を責めずにおれぬ類の恨みであった。

留まるところを知らぬ風に、その批判、非難の弁は続く。このコーディリアをして多弁と無縁と論じる人は居まい。ここにあるのは、別人であった。

Cordelia: Had you not been their father, these white  
flakes  
Did challenge pity of them. Was this a face  
To be oppos'd against the warring winds?  
To stand against the deep dread bolted thunder?  
In the most terrible and nimble stroke  
Of quick cross lightening? to watch —— poor perdu! ——  
With this thin helm? Mine enemy's dog,  
Though he had bit me, should have stood that night  
Against my fire; and wast thou fain, poor father,  
To hovel thee with swine and rogues forlorn,  
In short and musty straw? Alack, alack!  
'Tis wonder that thy life and wits at once  
Had not concluded all. —— He wakes; speak to him.  
Doctor: Madam, do you; 'tis fittest.

すっかり白髪に覆われてしまった父王の頭を目にして、まず口をついて出てきた言葉はまたしても、姉2人の仕打ちを批判することばである。引用の冒頭、their fatherのtheirとは、先の引用文中のmy two sistersを指す人称代名詞所有格である。第1行~2行に込める意図は、仮にこの父が姉たちの実父でなかったなら、偶然に遭遇する見知らぬ老翁であったなら、事情はどんなにか違っていただろうものを……。この雪片のごとき白髪（に覆われる頭）を目にして憐れを誘われずにやり過ごすことなどあり得ようか？ 誰がそのような無情を為しえよう。

荒れ狂う強風、天地を揺るがす雷、閃光に耐えた——この真白なる頭髮が・・耐え得たことが不思議であった。早や地肌さえ透けて見えるこの白頭。仮にこのわたくしの敵対するものが館の前に救いなく立つとき、知らぬ振りをしたか・・・危害を加えたからといって・・？ ここには、暗にコーディリアが自身の信義に対する自負を窺うことも出来る。しきりに、老いた父王への苦悶とその主因となった姉2人の非情、人の道に外れた不孝を断罪しつつ、自己の正当性をつまびらかに語る。それは、意図してのことでないとしても、結果としては自身の徳高き人格の称揚に繋がる。

だが、読者・観客の耳に響くのは、完璧なる善と真を体現するコーディリアの声であり、眼前には、外見の美までも備えた淑女、孝行娘コーディリア像が見事な立ち姿で現れる。

そして、引用末尾の嘆息「嗚呼、信じがたき摂理かな。心と体と、その二つの命をいちときには奪われはしなかった」(筆者拙訳) 引用第41行 'Tis wonderを人間の手の及ばぬ大いなる存在の為せる技を思わせる語と解して、「摂理」としたが、必ずしも、キリスト教信仰の唯一神を指しての訳語ではない。

これほどの苦難を一身に浴びたなら、正気を失うばかりか、きっと肉体の命の証である心の臓も（悲鳴をあげ）事切れたに違いない、と最悪の状況を想像してみせる第三王女のことは、父への深く、慈愛に満ちた寛大の愛、聖母の愛を思わせる広きこころを印象付けて余りある力を発する。だが、忘れはしまい、あの非情の父を、あの仕打ちを。・・・「縁切じゃ、親でも子でもなく、まさにただ今、この瞬間より、不徳義者よ、無縁、無一物となって何処へなりと出でよ。行き倒れとなろうとも儂の知ったことか！」・・・父は、我が寵子を捨てたのである、罵倒とともに。

それを、忘れた人の如く、コーディリアは慈愛を注ぐのである。痴呆となった老翁に。かろうじて正気を保つ人にこうまで、慈愛溢るる正義、信義の人となりうるか——(劇中に) 起きぬことに答えを与えるのは、今しばし控えよう。

#### <目覚めた父と娘> — 懺悔と赦し

第四幕第七場後半の見所は、父娘の応答にある。

目覚めた父王に望むことは唯一。「コーディリア」と名をもって呼ばれることであった。他方、恍惚の人となった父の意識は、混濁する。彼岸と現世、過去と現在、昼夜が錯綜する中、事の善悪だけは、何故か、混濁を免れ峻別される。

躊躇する仏王妃を促す医師の言葉に推されて、目覚めたばかりの老翁／老王に声をかける。

Doctor: Madam, do you; 'tis fittest.

Cordelia: How does my royal lord? How fares your

Majesty?

Lear: You do me wrong to take me out o' th' grave.  
Thou art a soul in bliss; but I am bound  
Upon a wheel of fire, that mine own tears  
Do scald like molten lead.

(Act 4. 7. ll. 43~48)

勇気を奮って語りかけるものの、正気とは思えぬ応答に落胆を隠せないコーディリアである。ただ、罪意識にさいなまれ、地獄、煉獄を己の死後にあてがわれる世界として甘受するリアがここにある。せめて、自分が誰であることを知らしめたい、そこで半ば夢うつつの父王に尋ねる。

Cordelia: Sir, do you know me?  
Lear: You are a spirit, I know. Where did you die?  
Cordelia: Still, still far wide!  
Doctor: He's scarce awake; let him alone awhile.

(Act 4. 7. ll. 49~51)

死者同士の対話と心得て応じるリア。ただし、目の前の女性らしき姿を我が娘と認識した様子は無い。唯、分かるのは、違いである。自分とは違って、生前は善行をなし、天国に召される資格のある魂がそこに見えていた。

「肉体の死後、もうひとつの命となって蘇る魂／靈魂でしょう、貴女は。」と、リア。コーディリアの問いかけに応えるリアだが、それは王女に喜びをもたらすことは無い。むしろ期待を裏切られて 悲嘆の声をあげる—— Still, still far wide! あまりに（２人の）隔たりは大きかった。自身が今、どこに居るかも定かでないリアである。

だが、諦めてはならない。

Cordelia: O, look upon me, sir,  
And hold your hands in benediction o'er me.  
No, sir, you must not kneel.  
Lear: Pray, do not mock me;  
I am a very foolish old man,  
Fourscore and upward, not an hour more nor less;  
And, to deal plainly,  
I fear I am not in my perfect mind.

(Act 4. 7. ll. 57~63)

自己を名もなき老人、無知な宿無しと卑下し、どうやら頭もおかしいようだと言わすリア。コーディリアを女神と崇敬するかのようには膝まずこうとさえするのを押しとどめる。だが、意識の混濁が事実とせよ、第三王女に対する非情を恥じて再会を拒んだと伝えられるリアである。ここより、案じてくれる王女と目を合わせることを、名乗りを挙げることを阻む迷い、後ろめたさがこのちぐはぐの対話を生んでいると考えることはできないか。

それが証拠に、回り道をした挙句に、自ら「もしやして、この御婦人、わたくしめの子ども／

娘、コーディリアではありまぬかの？」と、とうとう、問うべき言葉に辿り着くのである。それは、くどいばかりに、己の愚かしさ、矮小さを繰り返し訴えた後のことである。神々しさを放つ美しき慈愛の人を前に、大いなる存在に赦しを乞うが如き懺悔を口にした後のことであった。

Lear: Yet I am doubtful; for I am mainly ignorant  
What place this is; and all the skill I have  
Remembers not these garments; nor I know not  
Where I did lodge last night. Do not laugh at me;  
For, as I am a man, I think this lady  
To be my child Cordelia.

Cordelia: And so I am, I am.

Lear: Be your ears wet? Yes, faith. I pray weep not;  
If you have poison for me I will drink it.  
I know you do not love me; for your sisters  
Have, as I do remember, done me wrong:  
You have some cause, they have not.

Cordelia: No cause, no cause.

(Act 4. 7. ll. 65~75)

歓喜するコーディリアをよそに、この儂めを憎むのは無理からぬこと、貴女には十分な理由あつての憎しみ。姉娘2人とは訳が違う。あれらは、この儂に無体をはたらいた不屈き者。そうじゃ、貴女からならば、毒を盛られようとも、迷わず飲み干しますぞ。

引用文に関して特に注意を向けて欲しいのは、人称代名詞である。一貫してリアは、you, yourを用いている。けっして、thou, thy, theeは使わぬのである。そこが相手コーディリアとくっきりとした相違である。もはや、そのような親愛も、父としての高みに立つ優越も、言葉に忍ばせてはならない。そのことを半ば、直感、本能的に感じ取っていたのか、咎ある人として、身を低くし、頭を垂れ、赦しを乞う身であることを重々感じ入るリアであった。

無論のこと、聖者コーディリアは、お恨みしてよい正当な理由 (cause) などございません。と強く否定する。親に対する愛を自ら捨てることは人の道に外れること、unnaturalなることであった。ここにも、人々は、非の打ち所の無い完全無欠の徳義の人とされる根拠を知らず知らずのうちに見出す。しかも、この義の人は罪を背負う人への寛大さをも印象付ける。常のコーディリアに特有の短き言葉を実に有効に挿入していることが分かる。リアが目覚めて後は、殊更にそうである。劇冒頭の場面とはまた違った、言葉を惜しむ王女像である。

名乗りを済ませた2人は程なく、医師に諭され、対話を中断する。これ以上の発話、中でも時の空隙を埋める努力を意識の判然とせぬ頭脳に強いる危険は避けねばならなかった。ご自身の治める王国においてなのですよ、と安堵を与えようとするコーディリアの言葉に老人を騙すとは人が悪いとばかり、Do not abuse me と、信じようとはしない。だが、その身を預けて欺かれることなどないと直感したか、傲慢を捨てる瞬間を迎える。

Cordelia: Will't please your Highness walk?

Lear:

You must bear with me.

Pray you now, forget and forgive; I am old and foolish.

*[Exeunt all but Kent and Gentleman.]*

(Act 4. 7. ll. 83~84)

ようやくにして、不和と誤解による別離を経て今、再会、和解のときを迎える。硬く閉ざした心を老翁／老王は和らげ、無防備なる恍惚の人となって尚、解くことのなかった懷疑の糸も霧の如くも溶けていくようである。

国王としての誇りも権威も脱ぎ捨て、直截に赦しを乞う姿がそこにある。身を低くし、自ら老いを認め、老いたものの愚かしさ、弱さも受容し、信義の人に縋るのであろうか・・・。

すべては、嵐の最中、かの狂気の乞食、阿呆のトムとの遭遇が教えた掛け値なしの人間の本質を知ったことが始まりであった。玉座にあるものの傲慢を振りかざしたところで、一皮むけば、いや、王冠と綺羅の衣を剥ぎ取れば、目に入るは、裸の一個の肉体、やせ衰えた肉塊にすぎない。「嗚呼、奢れるものよ、トムに教えを請うがよい」と叫んだあのときに、自己の本質回帰の瞬間が用意されていたのであった。

そして、この懺悔と謝罪——第四幕第七場で虚飾を自ら脱ぎ捨て、直裁に許しを乞い和解をもたらした懺悔と謝罪を経てほどなく、リアは昇天する。いち早く召された慈愛の王女の跡を追って。第五幕第二場、国権をめぐる権謀術数の渦に飲み込まれる父娘は、和解の喜びも束の間、野心完遂の障害とばかり、牢獄に繋がれ命を絶たれる。

もはや死は恐れぬリアであったろうが、第五幕第三場、牢に引かれるリアは、牢獄を天国に見立てて、小さな宇宙に和解した愛娘とふたり、寄り添い生きたしとは願う。コーディリアと伴に過ごす獄は、むしろ天国に映ったのであろうか。

<鳥籠の鳥> — 小宇宙より、大宇宙を掌に

第五幕第一場、イギリス国内の王権争いもいよいよ苛烈を窮め、先王リアをないがしろにする点では一致したものの、長姉妹（ゴネリルとリーガン）の仲は表面とは裏腹、グロースター候の庶子エドモンドの権謀術数も絡んで醜悪さを増す。やがて、エドモンドは独断でリアとコーディリアの処刑を命じる。正義を重んじる人々による処刑の命令撤回も時遅し。コーディリアは敢え無く縊られ命の糸を断ち切られてしまう。リアの願いは夢に終わるのである。

そして、第五幕第三場、運命の女神の裁定に不満の意をもらすコーディリアを制し、「鳥籠の鳥となろうぞ」と語るリアの夢を知るものには、このコーディリアの死はいっそう耐え難く、酷いものと映るに違いない。

Cordelia:

We are not the first

Who with best meaning have incurr'd the worst.

For thee, oppressed King, am I cast down;

Myself could else out-frown false Fortune's frown.

Shall we not see these daughters and these sisters?

Lear:

No, no, no, no! Come, let's away to prison.

We two alone will sing like birds i' th' cage;

When thou dost ask me blessing, I'll kneel down  
 And ask of thee forgiveness; so we'll live,  
 And pray, and sing, and tell old tales, and laugh  
 At gilded butterflies, and hear poor rogues  
 Talk of court news; and we'll talk with them too ——  
 Who loses and who wins; who's in, who's out ——  
 And take upon's the mystery of things  
 As if we were God's spies; and we'll wear out  
 In a wall'd prison packs and sects of great ones  
 That ebb and flow by th' moon.

(Act 5. 3. ll. 3～19)

この引用でまっさきに注目すべきは、コーディリアが不正義には抗う姿勢をここでも見せている点であろう。対照的にリアの方は、たとえ不正義であれ、もはやその体现者——すなわち、姉娘2人のことである——には会いたくはない、寧ろ運命とやらに甘んじて生きるという。コーディリアとふたりならば飄々と生きて見せようというわけであろうか。

まずは、コーディリアのことばに目を向けることにしよう。引用文の冒頭、最善の意図を持ちながら、最悪の結果を招いてしまったものは、他にも例はありましょう。と、コーディリア。そう考えるなら、けっして嘆くに当たらぬやもしれぬ。だが、そうではあっても、父リアの身を想い、国王たる父の帯びた悲嘆を想うと、耐えがたき思いに襲われてしまうことも事実。コーディリアには、わが身ひとつなら、運命の女神とやらを相手に睨み返すだけの覚悟と意気地が確かにあった。それこそが、コーディリアをコーディリアたらしめる心意気である。太刀打ちのかなわぬ相手——運命の女神のような超自然の力であれ、あるいは現世の権威・権力を一身に帯びる絶対者であれ——信義に反するものには抗う心意気、その魂がここにも息付いている。

#### <信義のひと>

コーディリアの台詞第3行、'Myself could else out-frown false Fortune's frown.' は、劇の冒頭、王国分割の場でみせたあの、直截に信じることを口にして憚らぬ信義の人の真骨頂を思い起こさせることばである。人間の力の及ばぬ存在、神々の下した裁定であれ、過ちは過ちであり、抗う、拒む姿勢はみせずにおれぬ、見せずにおくものか・・・この魂である。(注7：ここでいう神々とはギリシア神話に登場する神々を指す) 人を謀り、侮り、道義を忘れるものを榮えさせて神と言い得るのか、そのような思いもあったろうか、コーディリアの胸のうちに。それ故に、せめて「運命の女神の醜きしかめ面——善なる人間に与える理不尽な定め——には、それを凌ぐしかめ面をもって抗議する」と言うのである。ただし、それはわが身ひとりで即座に行動に移せる時のことであり、今は、父の意を汲む必要があった。

「父上の娘と名乗っておいでの方たち、わたくしの姉とおっしゃる方たちのところに参って、直接お話してみましょうか？」(注8：木下順次の『リア王』邦訳を参照) それを父はきっぱりと拒む。顔も見たくないのだ、あの人の道に外れた輩、恩義知らずの女たち。「胸が悪くなる」といわんばかりに No, no, no, no! と「否」を4度も連発し、コーディリアの提案を退ける。理性の人と、感情の人に分かれるこの瞬間の父娘である。親愛の情を分かち合い、信頼で結ばれる二人であったが、降りかかる運命受容の姿勢には大きな違いがあった。単なる甘受を一貫して拒む人、それがコーディリアであり、この終幕近くに至ってもそこは不動であることに誰し

も感慨を覚えよう。

### ＜リアの夢想＞

では、リアは、抗うことなく運命の女神の与える定めに頭を垂れ、落胆のうちに牢に繋がれるのか？あの‘No, no, no, no!’の先には何が待ち設けるのか——牢獄、檻の中、高く厚い壁の包囲、自由の喪失である。いや、リア自身の目には、そのような暗闇、希望の灯なき暗闇が映っていたわけではない。

さあ、姉たちのことは忘れ、牢に繋がれよう、そこで誰に邪魔されることなくふたりして、鳥籠の鳥の如く囀り暮らそうぞ。さも、煩いのない穏やかな日々が待っているかのように末の王女をリアが誘う。過つことなき信義の人と、ひとつの牢に共生する資格を得ようとするのか、‘I'll kneel down / And ask of thee forgiveness’と、ここでも許しを請うている。だが、真に注目すべきは、その直後に語られる牢の暮らしを想像する言葉である。

引用第17行‘God's spies’の如くに下界の栄枯趨勢を眺め、身分高き者‘packs and sects of great ones’の盛衰も月の満ち干の如し、淡々と世の慣わしてと驚くこともなく、嗤いやり過ごそうと語るリア。第三幕において怒りに狂い、嵐に戦いを挑んだ姿はもはやない。世俗の欲も、争いも超越したかのような、それでいて傲慢はなく、ただ、諦念と神への信頼にすべてを委ねる心境を窺わせる。達観した捕われ人は、囚人ながら心は現世の呪縛から解き放たれたか、眼に浮かぶ宮廷人は虚飾の捕われ人、小さき蝶に過ぎぬ。

狂気の報いは、こうして世俗と虚飾からの解放となって現れ、リアに精神の自由を与える。また傲慢という衣／鎧を脱ぎ捨て、謙虚にコーディリアに許しを請うのも、この自由のなせる業であったろう。人間の卑小さに気付くのも狂気を仲立ちにしていることも実に興味深い。

だが、それにしても、劇作家シェイクスピアにどういう意図あつてのことか、達観と安寧の日々——牢の中とはいえ、すべてを託すことのできる末の王女とともに過ごす日々を老王に約束して劇の幕を降ろすことを敢えて拒むのである。

第五幕第三場の終盤、自らコーディリアの手を引き、あるいは、父の意を汲んだコーディリアが老王の手を引き、牢に向かって舞台を去ったのも束の間、観客は王の激しい嗚咽を耳にすることになる。

Lear:       Howl, howl, howl, howl! O, you are men of  
              stones!  
              Had I your tongues and eyes, I'd use them so  
              That heaven's vault should crack. She's gone for ever.  
              I know when one is dead and when one lives;  
              She's dead as earth. Lend me a looking-glass;  
              If that her breath will mist or stain the stone,  
              Why, then she lives.

(Act 5. 3. ll. 257～263)

人間の声を howl なる語で表記するとき、はたしてどのような感情を伝えようとしてこの一語に託すのであろうか？英語を母語とせぬ我々（日本人だけでなく、すべての異言語の民）は、あてのない想像をするよりすべは無いのか。

しかし、たとえ実感の伴う語感をこの howl から体感することは困難としても、4度に及ぶ

反復 ‘Howl, howl, howl, howl!’ と臍腑を絞るように叫ぶ声を耳にすることによって、発話者の内面に荒れ狂う感情——憤激、悲嘆、喪失、絶望、不信の入り混じる激情を感じ取ることはできる。少なくとも、そうした効果をもたらす howl の反復である。(注9: howl の原義)

逝ってしまった・・・と愛娘の死を受容しつつも、諦めきれぬ、信じるにはあまりに急なる処刑に、死を、絶命の事実を拒む心に急かされてか、リアは「鏡」を求める。鏡をコーディリアの顔にかざして吐息に鏡が曇るか否か、確かめると言う。生きていれば、吐息をもらすはずであった。狂気の中での正気というべきか、「鏡」の発想に感服する。生への執念、唯一信じることのできる存在を失うまいとするリアの執念の底には、愛が、natural affection —— 人の本来の愛がその源として在ることは言うまでもない。

### ＜望ましき女の声＞

リアを除いて誰一人、コーディリアの存命を信じるものは無い。これが（神の望む）世の終末かと嘆く声をよそに、リアは生を信じようとする。「鏡」ならぬ「羽根」が動いた！と——この娘さえ生きていて（生き返って）くれさえすれば、老身を襲ったすべての悲しみを償ってくれる、洗い流してくれる、僅かな望みであったのだ。それよりほかにこの世の関心もなく、聞く耳も持たぬリアには、他が何を取り沙汰しようと、馬耳東風。その耳底に蘇えるのは唯一つ、コーディリアの声であった。

Lear: A plague upon you, murderers, traitors all!  
I might have sav'd her; now she's gone for ever.  
Cordelia, Cordelia! Stay a little. Ha!  
What is't thou say'st? her voice was ever soft.  
Gentle, and low —— an excellent thing in woman.  
I kill'd the slave that was a-hanging thee.  
(Act 5. 3. ll. 269～274)

一転、リアは、コーディリアはもはや死したと直感する。娘に手をかけた、細い首に手をかけ縊死させた輩、裏切り者、そのすべてに呪いあれ！神に願わずにおれない。同時に、救ってやれなかった自分の不甲斐なさを悔いずにはおれぬリアである。処刑人を事後に殺めたとして何の甲斐あろう？ 愛しき愛娘（の命）は返ってきはせぬ。返らぬ／帰らぬと承知しつつ「嗚呼、待ってくれ、いかないでくれ！」とその名を連呼する。「コーディリア、コーディリア！」・・・不思議かな——2度呼んだ父の声に応えたか、娘の声が耳底に響く——What is't thou say'st? と聞き返すこのリアのころ。

あらぬはずの声に耳をすますうち、リアは、王女の声そのものに関心を凝縮させていく。なんと心地よき声であったか、柔らかで優しき品位ある声、甲高い声とは無縁の控えめな声・・・女にこそ望ましき理想の声であった。それは実に、女にあらまほしき「声の鑑」であった。

こうして、コーディリアという女性には、その人格も、女の資質においても——外見の美に加えて貞淑という内面の美德も兼ね備え——果ては声音さえも一点として非の打ち所のない人物像が賦与され、完成度が高まっていく。ここにもしやして、コーディリア像の形成される謎が潜むのであろうか。——出番も少なく、語る言葉も相対的に少ない、にも関わらず、印象深く、しかも理想の女性としての人物像を人々の心に、学者／研究者はもとより、読者、観客の心にも、比類なき美と信義の人となって刻印されるのではないか。そのように感じるのは、筆

者ひとりであろうか。

### <コーディリアと道化>

さて、劇中、リアが残す最後の台詞に再び「道化」への言及が顔を出す。唐突の感を免れないが、読み過ぎしてしまえぬのは、それが耐え難きコーディリアの死と深く結びついた言葉として語られるためである。

Lea:       And my poor fool is hang'd! No, no, no life!  
              Why should a dog, a horse, a rat have life,  
              And thou no breath at all? Thou'lt come no more,  
              Never, never, never, never, never.  
              Pray you undo my button. Thank you, sir.  
              Do you see this? Look on her. Look, her lips.  
              Look there, look there!                               [*He dies*]

(Act 5. 3. ll. 305~311)

引用第305行目、my poor fool。ここに姿をみせる「道化」なる語。後続の述語 is hang'd から明らかに fool とは理不尽な処刑によって命を奪われたコーディリアを指していることはいまでもない。劇序盤で、国王リアを揶揄した宫廷の道化 Fool ではない。第一義的にはそうである。だが、それでいてこの my poor fool なる語りかけ、かつ呼称は、どうしても宮廷お抱えの道化を思い起こさせずにはいない。ひとつには、老王リアにとって、親愛の情を込めて呼ぶが故に my poor と個別の感情を託した形容詞語句を添えている点に因がある。また、本論の始めに触れたように、道化とコーディリアの出番は互いに入れ替わるかのように（登場／退場を）勘案した節のあることも因のひとつである。そしてなによりも、この両者、老王リアにとって他に比類なき愛すべき同伴者である。気が付けば、最も愛すべき、慈しむべき存在を相次いで失うために遭遇する主人公。ここに至ってあげる悲しみの声・・ 'my poor fool is hang'd' は、重なり合うふたつの命、ふたつの存在の忽然と喪われる、その耐え難き哀しみの声であって不思議はない。

正気を失い始めて時を経たリアの意識に確かな自覚はないままの嘆きであれば、my poor fool に2人が重なり合っていると感じるのは、周囲のものであり、第三者——舞台の外に在る聞き手、読み手の解釈が介入していることは否めない。ただ、いずれに比重が重くかかって my poor fool と呼びかけ語るかといえ、それは疑問の余地なく、眼前に、いや我が腕の中にその身を預け、永遠の眠りに引き込まれてしまったコーディリアであったろう。いよいよ、もはやこの世にあらぬ命と覚悟せねばならぬ瞬間が訪れたのである。「もう息をせぬのか？ 二度と戻ってはこぬのか、儂のもとに・・」ああ、あってはならぬ、耐えられぬぞ——怒りとも、絶望とも分かつことのできぬ激情が Never, never, never, never, never. と5度の連発となって放たれる。

それにしても、ここにも反復表現が我々の目を引く。単純ながら、これほどに効果的に挿入した劇作家が居たであろうか。この場面のリアの息絶える直前のことばもやはり反復である。それも一転、歓喜の声による反復とされる。（注10：'Look there, look there!' は、コーディリアの蘇生を何故か直感／直観しての雄たけびと解釈される）

＜リアの歓喜？＞

あまりに唐突に、リア王が「これが見えるか？」と、周りのものに問いかけ、「この娘をみよ、この娘の唇を」と命じることに誰しも驚き、ためらう。そして 嗚呼！ほれ、そこに。嗚呼！それ、そこだ！」と声を荒げて叫ぶことに戸惑いを感じる。その直前の連呼 ‘never, never, never, never, never.’ との自然なる連関を見出せない、いったい、なに故突如 唇を指して「見よ、それ、そこに」と急かせるのか？尤も、舞台上の人々は、単に、狂気故、何を王が語ろうと、また彼らから何を語りかけようとも、期待した応答の帰らぬことを懷疑せず受容する風である。ただし、舞台の下、外界にあってリアの言葉を聞く者は、謎めいた言葉の意味を、真意を探ろうと躍起となる。必ずしも（舞台の）外なる人といえぬ演出家には大問題であろう。

筆者の個人的問題としては、いまだ未解決といわざるを得ない状況である。「歓喜」の声と解することに根拠なき同意、受容を示すのみであるが、ただ、納得しがたい思いを消しがたいのは、この唐突さである。現在のところ、狂気に、この唐突な変化、回帰の鍵を見るよりないか——と考えていると述べるに留めておきたい。

注

- 英語の原文では、Fool の台詞／唄として ‘He that has and a little tiny wit / With heigh-ho, the wind and the rain —— / Must make content with his fortunes fit’ (Act 3. 2. ll. 74~76) となっている。文意は「多少の知性を持ち合わせている者なら、お天道様次第で暮らしぶりが変わろうと、運を天に任せて、なんだかだと分相応に生きてくのさ。」(拙訳) といったところであろうか。  
\*そこから、拙論本文では、「足るを知る・・・」と意識を試みた。
- ペリカンは、我が子の生き血を吸う習性を持つとされ、その習性を模してここではリア王は、我が娘2人に恩を仇で返される定めを非道として嘆き、かつ強調しようとしている。但し、その比喩表現は、親子の立場を逆転させたものである。
- リアは、この後も乞食のトム（エドガーが変装した仮の姿）を慕い、my philosopher (Act 3. 4. l. 171) あるいは good Athenian (Act 3. 4. l. 175) などと呼んで、なお教えを乞うとする。この名も無く、卑しい身なりの、しかも意味不明の戯言としか思えぬ言葉を口走る狂人を傍から離そうとせぬ老翁／老王である。  
この乞食、少なくとも、正常なる神経を保持する者の目には常軌を逸した人間、いつてみれば浮浪者かつ気違いに過ぎぬ男ではあるが、予期せぬ子の裏切りに遭遇して自己を見失った者の目には、その混沌から救いを見出す道しるべを与える存在として映るようである。
- 一連の英国史劇、10作品におよぶシェイクスピア史劇に登場する王侯貴族の女性たちは、自らの悲運を嘆き、多くの言葉を吐露する。人生上遭遇する定めは、孝不幸いずれも受動的結果としてあてがわれるのであって、自ら選択した言動の招くものではない。それ故にこそ、恨みも深く、激しい呪詛となって現れることも少なくない。だが、往々にして饒舌である。  
また、詩作品中の代表的な女性として言及される貞女、美と貞節の鑑と歌われるルークリースの気品あふれる言葉も悲運を嘆き、非道に抗する多弁となって現れる。（『ルークリースの陵辱』は、シェイクスピアの詩作品であるが、『ソネット集』に次いで世に知られた作品である。）
- コーディリアの若さと真理を見通す力は、大変に興味深い不均衡である。劇中に散見する若くして人生の真実／現世の真理をつく言葉は注目に値する。  
拙論本文に既に触れたが、コーディリアが立ち去って後の幕では、老王／老翁に掛け値なしの現実を突きつける存在は、リアのお抱え道化 (Fool) であった。少なくとも、第三幕第四場までは、ケントの諫言を除いてリアの耳に痛き批判、非難を口にする人物はこの道化において他にはなかった。
- 仏王の真意は、推察するよりすべはあるまい。だが、詮索への欲求を拒む必要もあるまい。対岸のドーヴァーに來たりてみれば、予期を超えた不穏の動き。敏感に感じ取った仏王が無用の争いに巻き込まれることを恐れて、急遽帰国を決意したと考えることはできないか。無心の王妃に比して、仏王の愛は果たして一点の沁みなき無心か？  
イギリス国内の対立に乗じた王位継承への野心は皆無か。大義名分は、後の訴え——老王への孝心である。が、それを盾に、隠れ蓑に王妃に同伴、実は侵略を真意とした恐れ（可能性）はないのか。想

像は尽きぬ。

7. ギリシア神話においては運命を司る神は女神とされ、さらに複数の女神が総称として Fortune と大文字の呼称を与えられている。多くの場合、仮に幸運をあてがわれてもそれは長くは続かず、早晚、暗転の瞬間を迎える——とくに喜びに浮かれ過ぎる輩、幸運、強運を誇り、吹聴する者は誰よりもひどいしっぺ返しを喰らうのである。運命の女神の差し金である。この恐るべき Fortune 相手にコーディリアは、敢えて抗いの姿勢、抗議の姿勢を見せてくれようと言うのである。
8. 木下順二は、自ら創作劇を手がける人でもあったが、シェイクスピア劇の翻訳を幾編か手がけている。美しい日本語表現に魅了される人は少なくないことであろう。(参考：ウィリアム・シェイクスピア作、木下順次訳『リア王』、『豪華版 世界文学全集第1巻—シェイクスピア』所収、講談社、1978年(初版：1976年))
9. howl の原義については、確かなことは把握していない。原義を含めて、語学的知見をご教示いただければ幸いである。
10. リア王の叫び、'Look there, look there!' については、一般に、コーディリアが蘇生したのを見届けて、あるいは幻覚であったにせよ、眼前に「眼を」開け、「吐息」を洩らす一瞬を感知しての歓喜の叫びと解釈されてきたようである。もっとも、客観的証左は必ずしもない。大修館シェイクスピア双書の『リア王』の注釈者 P. ミルワード氏の解釈もキリスト教信仰を根拠にした見方の一例といえる。

\*本文中の引用は、大修館シェイクスピア双書『リア王』、及び、研究社刊のシェイクスピア叢書『リア王』を参照したものである。

#### 参 考 文 献

1. ウィリアム・シェイクスピア作、ピーター・ミルワード (Peter Milward) 編注『リア王』、大修館シェイクスピア双書、大修館書店、1987年
2. William Shakespeare, *King Lear, The Arden Shakespeare*, 1982, edited by Kenneth Muir, reprinted with corrections 1972, first printed in 1964, Methuen & Co. Ltd. London and New York.
3. ウィリアム・シェイクスピア作、市河三喜、嶺 卓二注釈『リア王』、研究社、1990年(初版1963年)
4. William Shakespeare, *The Tragedy of King Lear, Riverside Shakespeare*, textual editor, G. Blakemore Evans, with introduction by Frank Kermode, 1974, Houghton Mifflin Company, Boston
5. *Shakespeare-Lexicon A complete Dictionary of all the English words, phrases and constructions in the works of the poet* by Alexander Schmidt, LL. D., revised and enlarged by George Sarrazin, sixth edition, volume 1, 2, 1971, Walter De Gruyter, Berlin and New York.
6. ウィリアム・シェイクスピア作、小田島雄志訳、『リア王』シェイクスピア全集、白水社、1982年
7. ウィリアム・シェイクスピア作、福田恒存訳、『リア王』シェイクスピア全集、研究社刊、1960年
8. 松元寛著、『シェイクスピア——全体像の試み——』、溪水社、1979年
9. 松元寛著、『シェイクスピアの全体像——仮面と素顔のあいだ——』、研究社、1986年
10. 青山誠子著、『シェイクスピアにおける悲劇と変容「リア王」から「あらし」へ』、開文社、1985年
11. 中西信太郎著、『シェイクスピア批評史研究』あぼろん社、1962年
12. 中野好雄訳、『シェイクスピア伝説』岩波セミナーブックス26、岩波書店、1988年
13. 別宮貞徳監訳、柳沢圭子他訳『図説 ウィリアム・シェイクスピア』大英図書館シリーズ作家の生涯 The British Library、ミュージアム図書、2001年
14. マイクロ・マクローン著、村上淑郎他訳『シェイクスピアの名せりふ』、(株) ジャパン タイムズ刊、1991年
15. 福田恒存監修、『シェイクスピア ハンドブック』三省堂、1987年

—平成25年10月15日 受理—